

教職に関する科目「道德教育の研究」における 実践的指導力育成のための一考察 — S市立K小学校の「心に響く道德教育」実践事例を通して—

三 山 緑

東亜大学 人間科学部 心理臨床コース
e-mail: midorism@toua-u.ac.jp

〈要 旨〉

本研究は、教職に関する科目「道德教育の研究」の講義において、教職志望の学生の実践的指導力を高めるための示唆を、実際の道德教育実践事例に求めることを目的としている。

現在、わが国の小学校・中学校における道德教育は、年間35週の「道德の時間」が特設されているが、全面主義を前提に展開されている。そのため、「道德の時間」は常に各教科、特別活動、「総合的な学習の時間」（以下、「総合学習」とする）といった学習領域との相互関連性を考慮しながら、指導を展開しなければならない。

本研究では、こうした道德教育の原理が実際にどのように展開されているかを、S市立K小学校の「心に響く道德教育」実践事例への分析を通して明らかにした。K小学校では、年度当初に作成される道德教育年間指導計画が特別活動や「総合学習」等の内容とリンクする形で作成されると同時に、指導過程で児童・生徒の実態に合わせて題材へのアプローチを変化させていた。

以上のことから、道德教育の実践的指導力を高めるには、「道德の時間」と、各教科や特別活動、「総合学習」等の他の学習領域における指導とが、時間軸に沿って並行する形で進行することを、図や表を用いてイメージさせること、また一つの題材や読み物資料を巡って、それを扱う時期や児童・生徒の実態についていくつかの異なる状況を提示し、それに応じてアプローチの仕方を変化させる訓練をすることが重要であると言える。

〈目 次〉

はじめに

1. S市立K小学校の特色と道德教育推進の背景

1.1. 学校の沿革・特色

1.2. 学校教育目標と道德教育目標の設定

2. S市立K小学校「菜の花卒業式」における道德教育の展開

2.1. 地域教材「菜の花卒業式」

2.2. 「菜の花卒業式大作戦」の全体計画と実施過程

おわりに

はじめに

我が国の学校における道徳教育は、小学校学習指導要領「総則」に「学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間をはじめとして各教科、特別活動及び『総合的な学習の時間』のそれぞれの特質に応じて適切な指導を行わなければならない」とあるように、学校の全教育活動を通じて道徳性の育成を図るという全面主義が基底にある。いわゆる「道徳の時間」は、全教育活動において芽生えた児童・生徒の道徳性を「補充・深化・統合」という使命をもって、1958（昭和33）年の学習指導要領改訂以降、小学校と中学校において設けられている⁽¹⁾。このように、学校において道徳教育を展開するということは、年間35単位時間の「道徳の時間」を、単に与えられた読み物資料を消化していくのではなく、「道徳の時間」と各教科や特別活動、「総合的な学習の時間」（以下、「総合学習」とする）といった教育課程の諸領域との有機的連携を具現化することと言える。

しかし、道徳教育を学校の全体計画として作り上げ実施していくことは、道徳教育に対して意欲も経験も豊富な教員ですら難しさを感じているのが現状であるとするなら⁽²⁾、これまで学習者としてしか道徳教育に関わってこなかった大学生にとって、事前の計画がいかにか綿密なものであるか、ほとんど想像が働かないと考えられる。まして、年度当初の指導計画を前提としながらも、指導過程で児童・生徒の実態を把握しながら計画に修正を加えていく技術が要求されることに至っては、なおのことである。道徳教育の実践的指導力には、学校の全体計画として道徳教育を構想していく力と、指導過程で絶えず児童・生徒の実態に即した修正を行っていく力が不可欠であるとするなら、大学の「道徳教育の研究」の講義においてもまず道徳教育がどのような意図をもって「計画（Plan）」され、「実施（Do）」の段階でどのような根拠により修正されているのかを理解させなければならないと言える。

そこで、本報告では、道徳教育がどのように全体計画として具現化され、1時間の「道徳の時間」へとつながっているのか、S市立K小学校におけ

る実践事例を取り上げてみる。そして、教育課程の各領域との連携を図りながら、全体計画としての道徳教育を構想するための有効な視点を提示してみたいと思う。

1. S市立K小学校の特色と道徳教育推進の背景

1.1. 学校の沿革・特色

平成18年度現在のK小学校の児童数は407名、教職員数は23名（うち、教員が18名）であり、学校は閑静な住宅地の中に立地している。K小学校の創立は古く、「学制」公布の2年後の1884（明治7）年であるが、元来、この地域は江戸時代末期には藩校教育が盛んであったという伝統を受け継いでいるため、地域社会や保護者の学校に対する期待も極めて大きい。

K小学校の児童の特徴は、言語の活用により人間関係を構築しようとする姿勢が良く見られるという。こうした児童の積極性は、特に平成16年度から国語科の指導に力を入れてきた成果であると、現場の教員の間では認識されている。こうしたこれまでの指導の成果を踏まえ、さらに実践へと高められるべく、K小学校は平成18年度より文部科学省の道徳教育推進事業「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業—命を大切に作る心をはぐくむ教育の推進に関する研究—」の「特別活動と関連づけた道徳教育」の研究指定を受け、道徳教育を積極的に行うことになった⁽³⁾。

1.2. 学校教育目標と道徳教育目標の設定

K小学校では、「心身ともに健全で豊かな情操とたくましい実践力をもった児童を育成する」を教育目標にかかげており、平成18年度の道徳教育の目標を、「心身ともに健全で、豊かな情操をもち、明るく・かしこく・たくましく を目指して努力する実践的態度を育てる」とした。また、県の教育の基本目標「夢と知恵を育む教育の推進」に示されている「広い心」「温かい心」「燃える心」を受け、K小学校では、①他者を思いやる心、②協力し合う心、③お世話になる方への感謝の心、④自他の生命を尊重する心、⑤郷土や自然を愛する心、という五つの心と態度を育むことを実践課

題として設定した。

そして、K小学校では、これまでの国語教育の成果等を踏まえ、平成18年度より「交流活動」を基盤として道徳教育が展開されることになった。「交流活動」とは、1年生～6年生までの児童で構成された縦割り班（1班10名前後）における様々な活動、近隣の社会福祉施設や幼稚園との交流など、およそ「交流」をテーマにした学習活動全般を指しており、生活科（1・2年生のみ）、道徳教育、特別活動、「総合学習」の各領域において展開されている。

このように、K小学校においては、道徳教育目標が特別活動、「総合学習」との連携を図りながら、全校的に達成される体制になっている。次章では、K小学校における道徳教育の集大成とされる「菜の花卒業式」を通して、上述の実践課題がどのように全体の指導計画として具現化し、1時間の「道徳の時間」へとつながっているのかを見ることにする。

2. S市立K小学校「菜の花卒業式」における道徳教育の展開

2.1. 地域教材「菜の花卒業式」

「菜の花卒業式」とは、K小学校独自の地域社会に根ざした卒業式であり、K小学校区内の河川の土手に咲く菜の花のエピソードに由来している。K小学校区出身者である一人の男性が、地域の子どものために、1995年から地道に土手の雑草を取り除き、菜の花を植えるなどして環境改善に取り組んだ。そして、この取り組みは次第に地域社会の住民ボランティア活動へと発展し、菜の花の咲く範囲もより広範囲になり、今ではこの河川一帯がK小学校区のシンボルになっている。こうした経緯から、「菜の花卒業式」は、K小学校では「郷土や自然を愛する心」や「お世話になる方への感謝の心」を育むための地域教材として活用され、3月下旬の卒業式に向けて全校で菜の花の栽培をし、菜の花を卒業式会場に飾ることになっている。

平成18年度の卒業式を飾る菜の花の栽培スケジュールは、以下のようになっている。

1. 牛乳パックを活用したプランタ作り：
11月28日(火)・12/5(火)・12/8(金)
2. 菜の花の種まき：12/12(火)
3. 菜の花の管理について：種まき後～卒業式

菜の花の栽培は、K小学校独自の時間枠である「さわやかタイム」（特別活動）を利用して行われる。「さわやかタイム」とは、K小学校で毎週火曜日に、昼休憩後の10分間（1時35分～1時45分）に設けられた「交流活動」のための時間であり、縦割り班で何らかの活動に取り組む等に使われる。また、ミニ・プランタは、児童が一人一株ずつ、菜の花を苗から育てるためのプランタであり、全児童が1リットルの牛乳パックの下半分を切り、底部に穴を開けて手作りする。市販のプランタを使用せず、児童一人ひとりが自ら製作したミニ・プランタで一株ずつ菜の花の世話をするのは、栽培を通して児童の責任感を涵養するためである。

このように、K小学校にとって、「菜の花卒業式」とは、「郷土愛」を学ぶオリジナルの地域教材であるだけでなく、特別活動、理科や生活科、図画工作の学習でもある、いわば横断的・総合単元的な道徳教育なのである。

2.2. 「菜の花卒業式大作戦」の全体計画と実施過程

「菜の花卒業式」について、各教科や学習領域との関連性を示した一例が、〈資料1〉の「K小学校第6学年交流活動計画」である。資料1によると、特別活動のねらいが「役割意識」「集団の向上」とされているが、「菜の花卒業式」を成功させるという目標のもとに実際の特別活動が展開されるように意図されている。また、〈資料2〉は、「道徳の時間」「交流活動（特別活動）」「総合学習」それぞれの学習領域を、年度当初の計画のもとに、筆者が時間軸に沿って並べてみたものである。資料1において、「菜の花卒業式」と関連づけられた「イチョウ祭り」の授業は、第20回に配置されている。これは、年度当初、10月下旬予定のミニ・プランタ作り、11月下旬予定の菜の花の種まきに先だって、児童相互の協力し合う態度を形成するのが「道徳の時間」の目標とされたからであった。

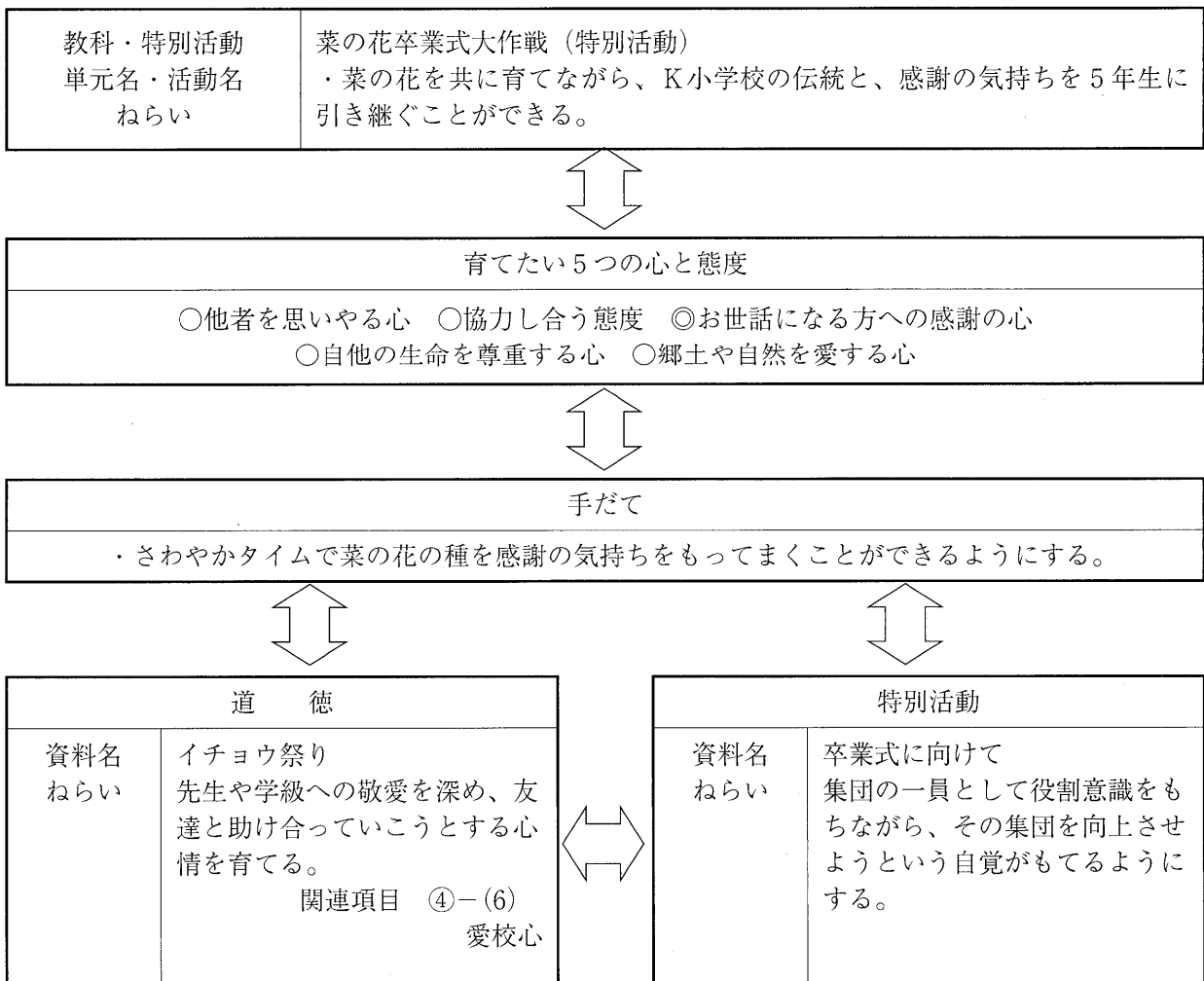
一方、こうした当初の計画を実施過程において何度か見なおすことを想定し、K小学校では資料2に示すとおり、年に4回ほど「校内研修」を設定した。平成18年度のK小学校年間研修計画案（1学期末変更分）によると、それぞれ5月31日に「道徳教育年間計画の見直し」と「交流活動計画の作成」が実施され、その後も11月15日に「児

童の実態把握（道徳）」、2月21日に「特別活動と交流活動見直し」、3月7日に「道徳教育と人権教育見直し」が予定されていた。特に、菜の花の種まきを行う直前の11月15日には、「心のアンケート」というK小学校が作成したアンケートの結果に基づいて「児童の実態把握（道徳）」を行うことで、「道徳の時間」の指導をより効果的に展開できるようにしている。

〈資料1〉 K小学校第6学年交流活動計画「菜の花卒業式大作戦（特別活動）」

実施月：通年

実施時間数 6時間



関連教科

--	--

出典：S市立K小学校「平成18年度交流活動計画」より作成

〈資料2〉

K小学校第6学年「道徳」「特別活動（さわやかタイム・特活・学校行事）」「総合学習」の指導計画

時期	1学期	2月	3月
道徳の時間	第14回「節度を守る」 第15回「自然の神秘」 第16回「伊能忠敬」 第17回「最後の勇者」 第18回「命の尊厳」 第19回「親切に」 第20回「祭りの心」 第21回「生活の心」 第22回「国語の心」 第23回「男子の助け合い」 第24回「真理の探究」 第25回「みんなのために」 第26回「つながる心」	第27回「花開く長所」 第28回「感謝の心」 第29回「ともに」 第30回「着順採用」 第31回「くびく心」 第32回「働くこと」 第33回「正風車」 第34回「くたくた」 第35回「自然の命」	第1回「節度」 第2回「自然愛」 第3回「希望」 第4回「役割」 第5回「生命尊重」 第6回「親切」 第7回「正直」 第8回「明誠実」 第9回「明心」 第10回「愛」 第11回「友情」 第12回「愛郷心」 第13回「創意」 第14回「運取」 第15回「愛郷心」 第16回「愛郷心」 第17回「愛郷心」 第18回「愛郷心」 第19回「愛郷心」 第20回「愛郷心」 第21回「愛郷心」 第22回「愛郷心」 第23回「愛郷心」 第24回「愛郷心」 第25回「愛郷心」 第26回「愛郷心」 第27回「愛郷心」 第28回「愛郷心」 第29回「愛郷心」 第30回「愛郷心」 第31回「愛郷心」 第32回「愛郷心」 第33回「愛郷心」 第34回「愛郷心」 第35回「愛郷心」
特別活動	菜の花の種取	種を保管	卒業式飾り付け (1～5年生)
特活	「修学旅行について(1)」	「修学旅行を終えて(1)」	「6年生を送る会に 向けて」(6時間)
行事	運動会	修学旅行・オリエンテーリング遠足	
総合学習	「平和な未来を願って」(9月～11月：30時間) 修学旅行・事前学習		
社会		「長く続いた戦争と人々のくらし」	
校内研修	第1回 (5/31)	第2回 (11/15)	第3回 (2/21) 第4回 (3/7)

そして、11月15日の校内研修後に作成された交流活動計画「菜の花卒業式大作戦」（修正版）が、〈資料3〉である。これによると、「育てたい5つの心と態度」の中で、「郷土や自然を愛する心」に「◎」が付いており、関連の読み物資料も「イチヨウ祭り」から「米百俵」へと変更になっている。「米百俵」は「4-(7)郷土愛」の資料として選定された読み物資料であるが、年度当初、6年

生の社会科（歴史）の学習との関連性が想定されていた。しかし、11月15日の校内研修で児童の実態把握を行ったところ、これまでの「交流活動」等を通して、児童相互の結束は十分に高まっているが、児童が抱く「郷土愛」には、「空気がよい」や「自然が残っている」等の自然環境に対する愛着に限定されており、地域に生きる人々や伝統・文化など内面的な良さについてはあまり意識され

〈資料3〉 K小学校第6学年交流活動計画「菜の花卒業式大作戦（特別活動）」（修正版）

実施月：通年

実施時間数 6時間

教科・特別活動 単元名・活動名 ねらい	菜の花卒業式大作戦（特別活動） ・菜の花を共に育てながら、K小学校の伝統と、感謝の気持ちを5年生に引き継ぐことができる。
---------------------------	---



育てたい5つの心と態度
○他者を思いやる心 ○協力し合う態度 ◎お世話になる方への感謝の心 ○自他の生命を尊重する心 ○郷土や自然を愛する心



手だて
・さわやかタイムで菜の花の種を感謝の気持ちをもってまくことができるようにする。



道徳	
資料名 ねらい	米百俵 郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもとうとする心情を育てる。 関連項目 ④-(6) 愛校心



特別活動	
資料名 ねらい	卒業式に向けて 集団の一員として役割意識をもちながら、その集団を向上させようという自覚がもてるようにする。



関連教科

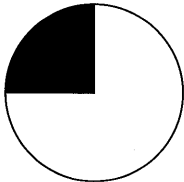
単元名・題材名 ねらい

ていないという結果が得られた。K小学校における道徳教育は、学校内外における「交流活動」を通じて「お世話になる方への感謝の気持ち」をもつことにある。こうした精神性を基盤として児童

の「郷土愛」を涵養していくためにも、「道徳の時間」において、改めて住民ボランティアの「郷土愛」を伝え、菜の花の種をまく目的意識を明確にすることが目指されたのである。以上の検討の

〈資料4〉K小学校第6学年「道徳」の授業の展開

- 1 日 時 平成18年11月29日(水) 4校時
- 2 場 所 6年〇組教室
- 3 ねらい 郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、郷土や国を愛する心をもとうとする心情を育てる。
- 4 準備物 ワークシート、心情図、菜の花卒業式大作戦写真、ゲストティーチャーVTR、ゲストティーチャー資料、さし絵、菜の花の種
- 5 展 開

学 習 活 動	教師の働きかけ
<p>1 菜の花卒業式に向けた活動の様子を想起する。 ○どのような思いで活動に取り組んでいたかを発表する。 ・卒業生のために ・感謝の気持ち ・思い出の卒業式になるように ○今年度まく予定の菜の花の種を見る。 2 資料「米百俵」を読んで話し合う。 ○米百俵の使い方について、小林虎三郎と藩士たちの考え方を確認する。 ・小林虎三郎…学校を建てる ・藩士達…分配する。</p>	<p>○本時のねらいについての方向づけができるようにする。 ○児童の思いを資料に関連づける。 ○読み聞かせをすることで、本時の視点を明確にさせる。 ○長岡藩の置かれている状況や藩士たちの生活などの事実を押さえる。</p>
<p>藩の危機を救うために、どちらの立場に立つか考えよう。</p>	
<p>3 心情図を利用して、自分の考えを表現する。 ・虎三郎…藩が栄える。 子どもに期待する。 ・藩士たち…飢え死にしてしまう。 少しでも分配して欲しい。 4 友達の意見を聞いてもう一度考える。</p> <div style="text-align: center;">  <p>(心情図) 藩 士 虎三郎</p> </div> <p>5 再び、菜の花卒業式のことを振り返り、菜の花の元の種を分けてくださった地域の方の資料とVTRを見る。</p>	<p>○二つの考え方の根拠となる多様な考え方を心情図で示させる。 ○机間指導を通して、各自の考え方を把握し、考え方がまとまっていない児童には支援する。 ○考え方を分類して板書することにより、自分の考え方を見直したりできるようにする。 ○発表を共感的に受け止める。</p> <p>○GTの資料やVTRを見ることによって、自分たちの地域のことを真剣に考えることの大切さを学ぶ。 ○本時の学習を終えて、地域の方の願いや優しさを感じ取ることができたかをワークシートで確認する。</p>

6 評 価

- 米百俵の使い方を自分のこととして考え、その思いを表現することができたか。(発表)
- 虎三郎と藩士たちの考え方には、多様な心情があることに気づき、他の心情も認めながら自分の考えをまとめることができたか。(発表・ワーク)
- GTの資料やVTRを見ることで、地域の方の願いや思いを感じ取ることができたか。(ワーク)

出典：S市立K小学校「平成18年度 第3回研究授業資料」より作成。

結果、実際に展開された「道德の時間」の学習指導案（本時案）が、資料4である。

実施された日程は11月29日、既に菜の花の種まきは12月4日に予定されていたため、授業の導入部では、そのことについてふれている。展開部では、「米百俵」のヤマ場である「学校を建てるか？それとも米を分配するか？」というジレンマを中心テーマとしつつも、「米百俵」の話の結末を敢えて提示していない。むしろ、終末部分のVTR視聴（10分程度）の布石として、藩士達の思いを追体験させ、「みんなのために」と考えて自分たちの町に菜の花を植え続けたボランティアの「郷土愛」を強く印象づけるよう構成されている。

おわりに

本報告では、S市立K小学校における「心に響く道德教育」が、全体計画としてどのように構築され、実施段階でどのように修正されたのか、筋道を描き出してみた。K小学校の道德教育で注目すべき点は、児童が学ぶべき「郷土愛」という道德的価値について、単に辞書的な解釈にとどめず、学校の実態に即して「学校を支える地域の人々の思いを理解し感謝の気持ちをもつこと」と具体的に定義をしている点である。

また、K小学校では、「交流活動」をあらかじめ習慣化しておくことで、児童の集団性を向上させる素地を作っている点が注目される。行事に先立ち、児童の準備状態を形成するために「道德の時間」が有効に活用されている点、それを可能にするための校内研修を行事直前に設定している点も興味深い。全校的な指導体制を工夫することで、「道德の時間」のための道德教育ではなく、道德教育の効果をあげるための「道德の時間」を展開することが可能となっているのである。このように指導体制が整備された上で、教員が総合单元的に道德教育を構想していくには、各教科・学習領域の横断的側面に着目しつつも、各々が連続性をもって展開されるということを、資料2のような形でイメージできなければならないと言える。

最後に、指導過程において計画の修正を決定づける評価のあり方については、現在筆者が最も関心を持つ所であるが、K小学校における「心に響

く道德教育推進事業」の総括を待って、別の機会に追究したい。

注

- (1) わが国において、戦前の修身教育への反省から、戦後は全教育活動を通じて道德性を形成するという全面主義の道德教育が採られ、道德教育固有の教科は設置されていなかった。しかし、戦後の子どもの規範意識の低下に対する批判、日本国内で高まっていた独立の機運から、「道德の時間」新設が検討されるようになった。「道德の時間」新設については、保守・革新の激しい対立が見られたが、当時の教育課程審議会委員の一人である稲富栄次郎が、古代ギリシャにおける道德の概念、すなわち「理知的徳（アレテー）」と「倫理的徳（エシックス）」を引用し、固有の目的をもつ各教科等の中心統合領域として「道德の時間」が必要だと説明したことが、「道德の時間」の導入の根拠となった。（貝塚 2004年。）
- (2) 西野は、2000（平成12）年度に道德教育に関する研究指定等を受けた全国の小・中学校から、無作為に100校の小学校（46校）、中学校（54校）を抽出し、該当校全学年の1組担任教員（小学校161名、中学校78名）に調査票を配付してアンケートを行った。その中で、「道德教育にどのようなイメージをもっているか」をたずねる質問に対し、「大切」と答えた教員は全体の82.8%に達し、「退屈」「押しつけだ」「役に立たない」などの否定的なイメージをもつ教員は少数であった。一方、「難しい」と答えた教員も64.0%存在し、「難しい」を「楽しい」や「やりがいがある」といった積極性に結びつけて見ている教員が24.8%しかいなかった。これらの結果から、道德教育に対する現場教員の複雑な心境が読み取れる。（西野 2004年。）
- (3) 文部科学省は2002（平成14）年度より道德教育の改善充実をねらいとして、「児童生徒の心に響く道德教育推進事業—命を大切にすることをはぐくむ教育の推進に関する研究—」を二年間の事業として開始した。事業の趣旨は、「児童生徒が生命の尊さなどを実感できる道德教育」

について、単に内容の斬新さに留まらず、全校的な指導体制の構築においても先行的な取り組みをしている学校を、文部科学省が支援し、その成果を普及することである。

【一次資料】

- ・ S市立K小学校「平成18年度 道徳教育年間指導計画（案）」
- ・ S市立K小学校「平成18年度 交流活動計画」

【参考文献】

- ・ 稲富栄次郎「道徳の時間設置の意義」貝塚茂樹監修（2004年）『戦後道徳教育文献資料集 第Ⅱ期 16 文部省編 新しい道徳教育のために』日本図書センター：130頁－143頁。
- ・ 植田和也（2006年）『『道徳の時間』についての大学生の記憶とイメージ』『道徳教育方法研究』第11号：1頁－10頁。（日本道徳教育方法学会）
- ・ 小笠原道雄編（1999年）『道徳教育原論』福村出版。

- ・ 西野真由美（2004年）「道徳の授業は難しいか－道徳教育研究校教員の声から－」『道徳教育方法研究』第9号：50頁－59頁。（日本道徳教育方法学会）
- ・ 森岡拓也（2000年）「中教審答申と道徳的実践力」『道徳教育方法研究』第6号：31頁－40頁。（日本道徳教育方法学会）
- ・ 文部科学省（1999年）『道徳教育推進指導資料 小学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開』財務省印刷局。
- ・ 文部科学省（1999年）『道徳教育推進指導資料 中学校 心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開』財務省印刷局。
- ・ 文部省（2001年）『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－道徳編－』財務省印刷局。
- ・ 山崎英則編（1999年）『これからの道徳教育を求めて－人間としての生き方を問う－』学術図書出版社。
- ・ 山崎英則・西村正登編（2005年）『道徳と心の教育』ミネルヴァ書房。

Cultivating Practical Teaching Skills in the "Study of Moral Education" as Part of the Teaching Certificate Program Curriculum —A Case Study of "Inspirational Moral Education" at K Elementary School in S City—

MIYAMA Midori

Faculty of Human Sciences, Department of Humanities and Social Sciences, University of East Asia,
2-1, Ichinomiya-gakuen-cho, Shimonoseki-city, Yamaguchi 751-0807, Japan.

The purpose of this paper is to suggest ways of enhancing the practical teaching skills of students taking the "Study of Moral Education" as part of the teacher certification program, by analyzing actual case studies.

At present, "Moral Education" classes at elementary and secondary schools in Japan are taught for 35 weeks a year. The principle of "Moral Education", as it is currently taught at these schools, is that it should be integrated throughout the entire school curriculum. Therefore, teachers must always consider how "Moral Education" classes are interconnected with other fields, such as each individual subject, "Special Activities", and "Integrated Lessons".

This study demonstrates how this principle is actually achieved, through an analysis of "Inspirational Moral Education" taught at K Elementary School in S City. At the beginning of the school year, teachers create the Annual Moral Education Teaching Plan in a way that clearly illustrates how the content of "Moral Education" is connected with that of other subjects, "Special Activities", and "Integrated Lessons" in this school. Moreover, teachers modify how they approach the teaching materials throughout the course of the year, depending on the specific situation and their pupils' progress.

We can apply several lessons learnt from this case study to the instruction of practical teaching skills for students at a university. First, in order to cultivate students' practical teaching skills, it is important to help students visualize how "Moral Education" classes progress parallel with other subjects, "Special Activities", and "Integrated Lessons" through the use of diagram and charts. Second, it is also crucial to train students in how to take different approaches to the teaching of "Moral Education" depending on the pupils' current abilities and specific situation.